「利用者さん一人一人と誠実に向き合いたい」と話す大原香音さん（高知市内）

家が明るくなる時間を

ただ今修業中 761人目

訪問看護師

大原（おおはら）香音（かのん）さん（22） 高知市神田

日高村で暮らしていた小学2年のころ、同居する祖父が筋萎縮性側索硬化症（ALS）を患った。全身の筋力が時間とともに落ち、胃はチューブにつながれた。容体が変わるたび、家族は重い空気に包まれた。

毎週来る若い看護師の女性はいつも笑顔だった。祖父の表情はわずかしか動かないが、ずっと話し掛ける。その間、家が明るく感じた。

こんな人になりたい―。憧れは小中高と変わらなかった。高校3年間はコンビニのアルバイトで学費をため、高知学園短期大学の看護学科に進学。2年前、高知中央訪問看護ステーションに就職した。

幼少期から、地域のお年寄りや大人と話すのが好きだった。訪問看護の方が、病棟勤務よりも幅広く人と接し、長く付き合えると感じた。

難病や病後の後遺症がある人など、利用者はさまざま。小児も、終末期の高齢者もいる。1年目は覚えることが山積みだった。医師が定期診察をするまでの、急変リスクのチェックも仕事。先輩に同行し、病態に応じた留意点や機器の扱いを必死で頭に入れた。

昨年1月に独り立ち。最初の訪問で利用者が見せる顔は、慣れた先輩の時と違っていた。異変の兆候はないか、会話を一つ一つ確かめ、台所や部屋の状態に目を配る。夕方、事務所に戻りタブレット端末に記録するとき、プレッシャーで押しつぶされそうになる。

利用者が望む暮らし方はそれぞれ違う。心配が先走るあまり、本人の意向とは異なるサービスを提案してしまい、距離が離れたこともある。

「在宅療養は、利用者さんの希望にいかに寄り添うか。思いを理解するためのコミュニケーションが大事だと実感します。『この人なら話したい』と思われる存在にならないと」

好きな言葉

訪問看護師は県内に約470人。新卒で選ぶ人は少ない。県は在宅ニーズの高まりを見越し、育成を進めている。

1日の訪問は4、5人。任される人が増え、関係を築く日々が続く。持ち前の明るさで、自分の「ダイエットネタ」なども披露し、利用者を励ましつつ笑顔の種を探す。

「利用者さんと話す時間は、今も大好き。重圧で嫌になりそうでも、会話の時間が救ってくれている感じなんです」

先日、認知症のある女性が名前を覚えて呼んでくれた。心の中でガッツポーズした。

写真・楠瀬健太
文・福田一昂
◆月曜日掲載

2024年1月29日（月） 高知新聞掲載記事